

氏 名	高 橋 康 夫 たか はし やす お
学位の種類	工 学 博 士
学位記番号	論 工 博 第1267号
学位授与の日付	昭 和 55 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	中世京都の展開過程に関する都市史的研究

論文調査委員 (主 査) 教 授 川 上 貢 教 授 巽 和 夫 教 授 西 川 幸 治

論 文 内 容 の 要 旨

我国の都市は現在機能的にも構造的に混乱した状態にあり、都市の構造的改革と高密度な都市生活空間の創造を強く要請されている。歴史的都市京都は平安京にさかのぼる長い歴史をもち、今なお発展をつづけており、その市域の中心部は高密度な都市生活空間の開発と再開発の繰り返しの中で形成されてきた。本論文は中世京都の都市空間形成過程にかかわる諸問題を都市史的視点に立って具体的に究明したものであって、序および本論3編11章と結びからなる。

序は、京都をめぐる建築・都市計画の分野における歴史的環境保存・整備のための動向ならびに歴史学の分野における日本中世都市の研究における新たな動向を指摘し、本論文の構成・概要を述べている。

第一編は、平安京にはじまり近世京都にいたる歴史のなかで、京都市中の高密度な都市生活空間が如何にして開発されてきたか、辻子の発生と展開を考察することにより論じており、3章からなる。第1章では「辻子」の言語的問題を論じ、用字、発音、語義、語源を明らかにしており、既往の辻子をめぐる諸説の適否を論じ新たな見解を提示している。第2章では辻子の開発が平安京条坊制を解体したこと、辻子開発の目的はより高密度な新街区の形成にあること、中世後期にはかかる街区が辻子「町」として展開したことなどを考察している。第3章では突抜・新道という類義語に注目して近世の都市再開発を論じている。即ち秀吉による京都市中の町割改造、近世中期に盛行した新地開発では辻子、辻子「町」の開発による都市空間形成の方式が継承されたことを明らかにしている。

第2編は室町時代における都市空間の形態と構造に関する問題を、上京の中心に立地する二つの街区空間を素材として、都市再開発に着目しつつ論じており、4章からなる。第1章では、永享8年(1436)伏見宮家が実施した後小松院仙洞御所跡地の再開発を考察しており、再開発の目的と経過、新街区の形態と構造、辻子周辺の敷地割と住人、土地問題など論じている。第2章では、宝徳4年(1452)における土御門四丁町の形態と構造を究明しており、敷地の形状、地割、住人に関して再構成すると共に、空間形態の視覚化に努め、また敷地規模と住人構成の分析を通じて同所の地域的性格を明らかにしている。第3章では土御門四丁町の土地支配と空間形成に関する問題を論考している。空間形成の主要因として領主の土

地支配の様態、それに対する権門勢家の介入の実態を明らかにし、つづいて宝徳4年にいたる空間形成過程を逐次あつづけている。第4章では、康正3年(1457)室通幕府の実施した土御門四丁町の都市再開発を考察しており、幕府による奉公衆のための屋敷地開発という事実を発掘し、次に新街区の形態、地割、住人を再構成し視覚化すると共に、その後の変遷過程や領主支配の実態を明らかにしている。

第3編は戦国時代における地域社会組織の結成と展開に関する問題を、町組「六町」を事例として論じていて、4章からなる。序章では「六町」を構成する町々の固有名称とその所在を確定し、「六町」の領域が既述の後小松院仙洞御所跡地を中核とするものであったことを明らかにしている。第2章では町の形成過程を論じており、応仁乱後の復興状況、地域生活空間、地域社会集団としての町の成立過程を明らかにしている。第3章では戦国期後半における「六町」の景観と構造を考察している。各町の家並と住人を可能なかぎり再構成しており、住人のうちの立入宗継、川端道喜の事蹟をあわせ考察している。また、「六町」の住人構成の特質を明らかにすると同時に、町組運営の主体との関連を指摘している。第4章では、「六町」の成立と展開の過程を考察している。即ち、「六町」の結成時期、結成の契機と共通の目標、活動の実態とその成果などについて、町組が地縁的生活組織であったことを根拠に据え、町組成立の要件および町組が外界と結ぶ社会関係の発展段階を史実に即し検証することで明らかにしている。

結びは、本論各編の研究成果を要約している。

論文審査の結果の要旨

今日、都市における機能と環境の悪化に対処し市街地整備の方策が緊急の課題として要請されている。とくに歴史的蓄積をもつ都市における歴史的環境の保存と整備を主軸とする事業の計画・実施に際して、歴史的な空間構造や社会構造のそなえるシステムを豊かな価値ある資産として評価されねばならないとする風潮が強くなってきている。本論文は早く平安京に出発し、現代になお発展しつつある歴史的都市京都を対象とし、とくに律令制の衰退にともなう平安京の変容から近世都市へ大きく発展するにいたる中世京都に見る高密度な生活空間の開発手段、都市街区の形態と構造、都市社会組織の成立と展開を解明したものであり、多くの史実の発掘と復原にもとづき着実に論証している。得られた主な成果を挙げると次の通りである。

(1) 平安京は条坊制を基準に構成された都城であったが、平安末期には条坊制の道路と街区との有機的層序的体系がくずれ、単調な格子状町割の都市に変質していた。この時期に発生を見た辻子は条坊制外の新道であって、旧来の街区を再開発し、より高密度な生活空間を形成する目的で導入されたものであることを強調し、既往の辻子に対する諸説を批判し、都市史上に意義づけている。次に辻子の展開過程を中世奈良と京都の諸例について検討し、街区の開発が辻子の開通と密接な関連のもとに行われたことを実証している。そして近世初頭に秀吉が実施した京都の地割改造では突抜・突抜町の形成に重点が置かれたこと、それは中世後半に展開を見た辻子・辻子町の開発による都市空間形成の方式を継承したものであり、将来の人口・家屋の増大と街区の形成にそなえたところに画期的意義を見出し評価している。

(2) 室町時代京都固有の都市空間の形態と構造を探るため、都市再開発に着目し、上京に立地する二つの街区について、街区形成の要因と変遷を明らかにしており、再開発で生れた街区内の地割と住人の関係、

住人の構成と生活を再構成して視覚化に努め、その街区の地域的性格を考察している。即ち、永享8年(1436)に伏見宮家の管理に委ねられた後小松院仙洞跡地が東西・南北両方向に新設された辻子を骨組とする宅地割の実施によって伏見宮家の近臣、被官衆および権門勢家に頒給し高密度な住宅街区に更新されたこと、次に中流公卿土御門家の屋敷に前身をもつ土御門四丁町の南北朝時代、室町時代の領主権の移動と屋敷地の再開発の変遷をあとづけ、各時期における地割・宅地規模・住人構成を復原し、商工業者が住人の大半を占める庶民の住区から転じて幕府の収公による將軍家奉公衆のための屋敷町への変化を明らかにし、土地利用形態の変化を具体的に実証している。

(3) 戦国時代末の京都一条烏丸近辺に所在した六か町からなる町組「六町」を対象に、都市住民の自治的な地縁的生活組織である町組に関する基本的課題―町組結成の時期、結成の要因と過程、内部構造、活動の実態と成果―を解明している。即ち、六町を構成する町々と所在を確定し、各町の形成過程を明らかにした上で、六町の家並と住人を再構成してその特質を検討し、禁裏と諸公卿に関係をもつ住人を指導層にもち、禁裏と互酬関係で結ばれた六町の特殊性を指摘する。

以上要するに本論文は都市史研究の新分野を拓き、研究水準の向上に大きく資すると共に研究進展の上で多くの知見を加えたもので、学術上、實際上貢献するところ少なくない。

よって、本論文は工学博士の学位論文として価値あるものと認める。